

今回は津山藩医・宇田川玄真が尽力した江戸時代最大の翻訳事業について紹介しましょう。

玄真が活躍していた江戸時代後期には、西洋諸国の海外進出が進み、日本近海にもしばしば外国船が出没するようになっていました。国防のため外国の事情を知ることが大きな課題となった幕府は「蕃書和解御用」を新設。長崎のオランダ通詞・馬場佐十郎と仙台藩医・大槻玄沢の2名を任命して、蘭書や外交文書の翻訳に当たらせました。洋学者にも幕府の中に活躍の場ができたのです。

その2年後の文化10年（1813）、玄真が3人目の蕃書和解御用に命じられ、藩医の傍ら月に8回ほど幕府の仕事をするようになりました。

ここでの普段の仕事は、フランス人シヨメールが作った『家庭百科事典』（オランダ語版）を翻訳することでした。2名で翻訳と校合を行い、詳細な注を加えて作った翻訳稿本は100冊以上に及び、それは今でも静岡県立中央図書館の葵文庫に保管されています。

この稿本を『厚生新編』といいます。「厚生」とは「生を厚くしてもって民を養う」という儒教の教えに由来しています。玄真も他の洋学者たちも「西洋の事物を紹介することで、人々の生活をより豊かにしたい」という思いで翻訳に取り組んでいたのでしょう。この訳文は幕府から公開されることはありませんでしたが、翻訳に携わったメンバーは、これで得た知識を自分の研究に生かしたのです。

『厚生新編』は弘化2年（1845）ころまで作成されたと考えられ、その間に佐十郎、玄沢、

筆 漫 覧 博 学 洋

～玄真と『厚生新編』～

玄真を始めとして宇田川榕菴や箕作阮甫ら一流の洋学者計12名が参加し、知識のすべてを投入します。中でも玄真は天保3年（1832）に隠居するまでの19年間この事業に力を注ぎ、何と全体の4割余りを担当しているのです。

玄真が実績を上げたことで、この後も津山藩の洋学者が次々と幕府から任務を命じられ、幕末の外交や教育などに重要な役割を果たすこととなります。



▲シヨメール『家庭百科事典』と『厚生新編』

※透かしの家紋は右が箕作家、左が宇田川家のもの

つやま 広報 2月号
平成21年 2009 652号

編集・発行（毎月10日発行）
津山市総合企画部市長公室（市役所3階）
〒708-8501 岡山県津山市山北520番地
☎0868-23-2111(代) ☎0868-32-2152
Eメール kouhou@city.tsuyama.okayama.jp

☆広報つやまはホームページで閲覧できます。
<http://www.city.tsuyama.okayama.jp/>



市制施行80周年、津山の歴史を築いた先人の努力に感謝しながらの編集でした。気付けば、ロウバイも咲き、おまけにタンポポの花まで見つけました。雪もまだちらつきますが、三寒四温。春の足音が近づいています。(2-3)



特集記事の作成のため、市役所などに保存している古い写真をたくさん見ることができました。生まれる前の写真や幼なすぎ、記憶に残っていない津山の風景など、とても貴重なものばかり。これも広報担当の役得ですね。(＆)



つぶやき 編集室

皆さんにとって、優しくそして温かい記憶を蘇らせるものはなんですか？私は梅の香りです。「梅の里公園」では、山一面を覆い尽くす梅花とその芳香に包まれることができます。14品種の色や香りの違いを楽しみに行ってみませんか。(2)



12月中のひとの動き

人口	109,744人(前月比△59)
男	52,331人(同△39)
女	57,413人(同△20)
世帯	43,849世帯(同△27)
転入	220人
転出	252人
出生	82人
死亡	109人

(1月1日現在)

広報つやまは、環境保護のため再生紙と大豆油インキを使用しています。読み終えた後はリサイクルにご協力ください

